

何でも読もう会

書物名	『変身』 カフカ	開催 日時	2022.6.1	推薦	清水
巻・章	全編		青少年セ	出席者	5名
<p>原文の執筆は1912年、出版は1915年。カフカは病気で夭折、生前の刊行はわずか数冊、その中の1冊。</p> <p>プラハに生まれ育ったユダヤ人で、父親は小間物商で財、地元のドイツ人社会に仲間入りを許された。</p> <p>19世紀末～20世紀初頭のドイツ系ユダヤ人は、暴力を伴う排斥運動にさらされ、数百万人がアメリカに逃げた。そういう時代背景の最中の作品。</p> <p>1. 主人公グレゴールが不安な夢から覚めると、自分の姿が一匹のとてつもなく大きな毒虫に変わっていた、と衝撃的な書き出しで始まる。</p> <p>この「大きな毒虫」が暗示するものがメインテーマ。出席者が思い思いに自説を述べた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・不条理な世の中を象徴する存在 ・現代人の「蒸発」したくなる気持ち、「引きこもり」たくなる気持ち ・周囲とコミュニケーションを取れなくなった人間の孤独感 ・ドイツ社会に貢献しながら排斥されるユダヤ人のやるせない気持ち 等々 <p>今でも定説はなく研究が続いているようだ。</p> <p>2. 家族の反応が一人ずつ異なる。心配してかけつけた支配人（上司）と本人との仕事に関する評価のずれ</p> <p>3. 新たに来た3人の借家人の出現が舞台回しの役割</p> <p>4. 「毒虫」が死んだあと見せる残った家族の安堵感、はればれ感は何なの？ など、話の論点は尽きず。</p> <p>5. 今のウクライナ侵攻も現代の不条理だ、との意見があがった。</p>					